

令和元年9月7日現在

機関番号：34314

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04118

研究課題名(和文) 韓国放送と「歴史認識」：歴代8・15記念ドキュメンタリーに関する歴史社会学的考察

研究課題名(英文) The Changes of The Discourse of Nationalism in "8.15 Television Documentaries" of Korean Broadcasting after The War

研究代表者

崔 銀姫 (Choi, Eunhee)

佛教大学・社会学部・教授

研究者番号：30364277

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、戦後韓国における「民族主義(ethnic nationalism)」をめぐる言説の変容を検討するために、1961年開局以来現在に至る70年余りの間に韓国公共放送が毎年恒例的に制作し続けられてきた「8.15」ドキュメンタリーシリーズのイデオロギー装置を分析対象としながら戦後のテレビドキュメンタリーシリーズにおけるナショナリズムの言説の中の「反日」と「反共」を中核に持ちつつ、近代韓国の約36年間に亘る「植民」の記憶が模索してきた支配的な言説を中心とするナショナリズムの言説と他者のイメージの構築とその背景、そして歴史的な変容をバフチンの理論的方法論を用いて考察したものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、第1に、研究対象の独創性と先駆的な学術成果であった点が挙げられる。人文社会科学やメディア研究において韓国の「8.15」ドキュメンタリーシリーズを研究対象に戦後韓国におけるナショナリズム言説変容を考察したのは初めての試みであるので、本研究は極めて先駆的かつ独創的な成果である。第2に、新しい方法論を呈示した点が挙げられる。本研究では研究方法論としてバフチンのマルクス主義と言語哲学に関する理論をもととする独自のテキスト分析視座を方法論として試みた。こうした新たな分析枠組を構築した試みはこれまでの先行研究では十分になされてこなかった挑戦的な提案として示唆的であるとともに有意義である。

研究成果の概要(英文)：This project aims to contribute to assess the changes of the discourse in “8.15 Television Documentary” of Korean broadcasting after the War. There is a large volume of published studies describing the Nationalism of Korea, and a considerable amount of literature has been published on Ethnic Nationalism of Korea, however previous studies have not treated to “8.15 Television Documentary Series” and examined on the discourses of the texts, and few researcher have been able to draw on underlying cultural practices of the series. The methodical approach taken in this research is a mixed methodology based on Bakhtin’s Dialogism approach and the study of ideological representation mediated Others what was excluded to create self identity and Cultural Studies. This research provides new insights into the discursive hegemony of 8.15 Television Documentaries as the national discourse of the Ideological State Apparatuses and the historical changes of dominant discourse of Nationalism.

研究分野：社会学

キーワード：ナショナリズム 反日 反共 8.15 ドキュメンタリー 韓国放送 言説分析

1. 研究開始当初の背景

2015年は戦後70周年ということで、日本のメディアは各種多様な「戦後70年特別企画番組」を制作・放送してきた。このように短くない年輪を重ねてきたにも関わらず、日本は隣国（韓国や中国）との「歴史認識」の差が相変わらず未可決の大きな課題として残されている。そして、世論の「歴史認識」に関わるいわゆる「ジャーナリズム」を背負ってきた日本の新聞やテレビといったマスメディアの役割は、放送史のなかで「評価」されることより「反省点」が多く残されているように見受けられる。

一方、2015年11月に韓国の朴槿恵政権は2017年より中学と高校の歴史教科書を「国定化」する方針を確定したが、例えば「歴史認識」をめぐる熾烈な対立の歴史を歩んできている隣国の韓国の場合はどうであろうか。近代史の中で日本の植民地であった30年間以上の経験と記憶は韓国メディアにおいていかに表象されてきているのか、こういった隣国の事情を歴史的文化社会学的な観点から体系的かつ分析的に解釈することは、現在の両国間の「歴史認識」の格差の実態と原因を究明できると共に、ジャーナリズムを牽引するマスメディアの課題と可能性を追求・提示できると考える。また、本研究は、今後の日韓両国の未来志向の関係性のために、非常に有意義な問題意識として、実際に社会的な要望も高まっている。しかし、「韓国放送」（テレビドキュメンタリー）を対象とした「歴史認識」を分析・研究した実績は、未だに日韓共に皆無の状況である。こうした現状を踏まえて本研究においては、「韓国」の公営放送局（KBS）が長年制作・放送し続けてきた「8・15記念」ドキュメンタリーを研究対象に注目すると共に、日韓の「歴史認識」をめぐる現時点での様々な問題を克服すべく、韓国のテレビドキュメンタリーにおける「歴史認識」をめぐるナショナリズムや、ポピュリズム、そしてジャーナリズムの構図と原因を分析・解釈することで具体化する。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は韓国の国営放送（現在は公共放送）が1961年から制作・放送してきた「8.15」ドキュメンタリーシリーズを実証的な研究対象として取り上げながら、戦後韓国におけるナショナリズム言説の変容の歴史を考察するものである。

3. 研究の方法

- (1) バフチンのマルクス主義と言語哲学を基とするダイアログ理論(Dialogism)
- (2) カルチャーラスタディーズ

4. 研究成果

「8.15」ドキュメンタリーシリーズとは、所謂国家的な祝日(National Holiday)として制定された「光復節(=8月15日)」を記念するために枠づけられたナショナルなイデオロギー装置として、現在もなお韓国の公共放送局(KBS)で持続的に制作・放送されている。

現在本研究の成果として、今後刊行予定(崔銀姫『反日と反共：戦後韓国におけるナショナリ

ズム言説』明石書店:2019年)である論文としてまとめることができているが、論文における研究対象となった「8.15」ドキュメンタリーシリーズの180本の中で選定した番組をまとめると下記の表1.の通りである。

表1. 各章で取り上げた「8.15」ドキュメンタリー番組

章	番組・タイトル	放送局・放送日	時代背景	テーマ
2	「8.15 特集」4部作シリーズ第3部『光復の歓喜』	KBS、 1977.8.13	光復 32年 5.16(クーデター)	統一祖国
3	8.15 海外企画8部作シリーズ『移民韓国人、このように成功した』第1部『洋服屋三兄弟』	KBS、 1983.8.8	朴正熙政権終焉 言論統廃合	移民韓国人
4	8.15 企画『韓国人の一日』	KBS、 1987.8.12	5.18 抗争 6月抗争	韓国人と中産階層
5	光復50周年特集『まだ終わっていない金の戦争』	KBS、 1995.8.14	金嬉老事件 (1968.2)	民族差別
5	光復節特集『在日、悩む魂』	KBS、 2009.8.14	韓流ブーム(2004) 日本大衆文化開放	様々なアイデンティティ
6	8.15 企画4部作シリーズ『戦争と日本』第4部『忘却する国 贖罪する国』	KBS、 2014.8.22	ドイツ元大統領の謝罪、安倍首相(憲法改正) 嫌韓デモ	戦後の戦犯や労役者の処理、未来への覚醒

(出典：筆者作成)

なお、論文における各章の構成と内容は下記の通りである。

第1章では、韓国の1940年代から1950年代までの歩みを、1960年代から登場する韓国におけるテレビ放送の開局と、そしてテレビ放送とほぼ同時に開始された「8.15」ドキュメンタリーシリーズにおける言説の変容を考察するための「前景」として構成・記述した。

第2章では、1960年代韓国社会とテレビ放送の開始をめぐるメディアの普及とメディア消費の事情について紹介しつつ、初期のテレビ放送から始まっていた「8.15」ドキュメンタリーシリーズに関連する記録について述べた。この「記録」というのは、初期のテレビ放送の時代から制作放送されていたという内容が、KBS放送年鑑(1962年度)には関連する記事と写真として掲載されていたにも関わらず、アーカイブスで閲覧できる初期の1960年代の「8.15」ドキュメンタリーシリーズは現在残っていなかったからであった。論文の巻末の「韓国公共放送局にお

ける歴代「8.15」ドキュメンタリー目録」の添付資料から確認できるが、現存するのは1970年代の僅かな「8.15」ドキュメンタリーシリーズが最も古い映像となっている。こうした事情を踏まえて、第2章では、現存する「8.15」ドキュメンタリーの中で最も古くて、更に比較的シリーズの映像が温存している中で、「タイトル」や「放送日」、「制作者」の全てが確認できるという条件を満たす、1977年の「8.15」ドキュメンタリー4部作シリーズ『8.15特集』を取り上げて分析した。

1977年放送された光復32周年記念『8.15特集』4部作(1977.8.11-14)の中の第3部『光復の歓喜』(1977.8.13放送)の放送時間は33分尺であった。番組は、韓国の歴史の節目に関係する戦争や、その他の歴史的な事件、政治家などの重要人物を取り上げながら、関連する歴史事実を白黒の記録写真や新聞記事、過去の記録フィルムを挿入しつつ、既に完成されている台本をもとに「解説者」が視聴者に語りかけるという手法の、最も典型的で古典的なスタイルの「説得的」ドキュメンタリーであった。

第3章では、8.15海外企画8部作シリーズ『移民韓国人、このように成功した』の第1部である『洋服屋三兄弟』(KBS,1983.8.8放送)を取り上げて分析した。『移民韓国人、このように成功した』は、歴代ドキュメンタリーシリーズの中で初めて8部作で企画・制作・放送された点や、初めて8部作全てがオール海外ロケであった点などから意欲的に企画された、当時のKBS放送の主力の特集番組であったことが容易に推定できるシリーズであった。つまり、既存の「8.15」ドキュメンタリーの事例とは異なる、「破格的」な制作費と編成の時間枠を執行しながらこうした番組を制作・放送した裏には、国家主導による1980年の「言論統廃合」によって規模的に大きくなってきたKBS-TV放送局の表の事情があったものの、その他にも当の政局と政策に足並を揃えようとする放送局側の企画をめぐる強い「意図」があったから可能となったと推定できる。

第4章では、8.15企画『韓国人の一日』(KBS,1987.8.12放送)を取り上げた。この番組の時代背景は同年度に起きた「6月抗争」であった。8.15企画『韓国人の一日』は、約50分尺(49:50)で制作された単発のドキュメンタリーであった。番組のストーリーは、一日の24時間の時刻の動きを追いながら韓国の津々浦々の「普通」の韓国人の暮らしを今の韓国人の「ある一日」として構成することを企画したものであった。

第5章では、光復50周年特集『まだ終わっていない金の戦争』(KBS,1995.8.14放送)と光復節特集『在日、悩む魂』(KBS,2009.8.14放送)の二つの番組を取り上げた。二つの番組の共通する点は「在日」が主人公である点がまず挙げられる。二つの番組の中の「在日」をめぐるのは、「民族的差別」による「反日」の言説 vs. 「大衆的なスター」の様々な「在日」のアイデンティティの言説が語られていた。

第6章では、8.15企画4部作シリーズ『戦争と日本』第4部『忘却する国 贖罪する国』

(KBS, 2014.8.22 放送)を取り上げた。『戦争と日本』は、当時韓国放送局の代表的な定期ドキュメンタリーである『KBS パノラマ』の編成枠(木・金の夜 10 時)の中で約 1 カ月間、すなわち 2014 年 8 月 1 日から週一回 4 週間連続で放送された(KBS、2014 年 8 月 1 日, 8 日, 15 日, 22 日放送)。4 部作シリーズの各サブタイトルは、第 1 部が『戦犯となった朝鮮青年』、2 部が『南京の記憶』、3 部が『裕仁と終戦勅書』、4 部が『忘却する国 贖罪する国』であった。この 4 部作の中から本章で重点的に取り上げられたのは、最終編の第 4 部『忘却する国 贖罪する国』の番組であった。その理由は、番組シリーズの中で最終編がシリーズの企画の意図の面において最も「分かりやすく」、そして番組制作の目的が全面的に表象されていたからであった。

表 2. 各章の「8.15」ドキュメンタリーシリーズと言説

章	番組タイトル(放送日)	言説
2	「8.15 特集」4 部作シリーズ第 3 部『光復の歓喜』 (KBS、1977.8.13 放送)	民族統一、反共、新しい時代、 統一祖国
3	8.15 海外企画 8 部作シリーズ『移民韓国人、この ように成功した: 第 1 部洋服屋三兄弟』 (KBS, 1983.8.8 放送)	移民、貧困と苦勞、克服、勤勉さ、 意志、家族愛、「韓国人」の矜持
4	8.15 企画『韓国人の一日』(KBS, 1987.8.12 放送)	民主化を支えた中産階層の底力
5	光復 50 周年特集『まだ終わっていない金の戦争』 (KBS, 1995.8.14 放送)	貧困、民族的差別、朝鮮人
5	光復節特集『在日、悩む魂』(KBS, 2009.8.14 放送)	複数の祖国、「在日」、多様性
6	8.15 企画 4 部作シリーズ『戦争と日本』第 4 部『忘 却する国 贖罪する国』(KBS, 2014.8.22 放送)	未来に寄与、覚醒、能動的被害者、 遅いが遅すぎはしない

(出典：筆者作成)

以上、冒頭で取り上げていた戦後韓国の民族主義言説の変容について整理するならば、戦後韓国の公共放送におけるイデオロギー装置としての「8.15」ドキュメンタリーシリーズにおけるナショナリズムの言説は、「反植民地ナショナリズム(Anti-colonial nationalism)」「公式ナショナリズム(Official nationalism)」「民主主義的過激ナショナリズム(Democratic radical Nationalism)」「トランスナショナリズム(Transnationalism)」のようにその内実的な変容とイデオロギーの進展(Ideological Development)があったとまとめられる。

しかしながら戦後韓国におけるナショナリズム言説をめぐる変容は、絶えない自己アイデンティティ模索の歩みであって、回収されて固定される有形物ではなく、今尚想像されながら「対話」の中での進行型である側面をもあることを今一度加えておきたい。

参考文献

- Althusser, Louis (1971) *Ideology and Ideological State Apparatuses, Lenin and Philosophy and Other Essays*, Monthly Review Press, pp.127-186
- Anderson, Benedict (1991) *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Verso/ London =(1998)白石 さ や・白石 隆 訳『増補 版想像の共同体:ナショナリズムの起源と流行』 NTT 出版
- Appadurai Arjun (1996) *Modernity at large: cultural dimensions of globalization*, University of Minnesota Press = (2004) 門田健一訳『さまよえる近代: グローバル化の文化研究』平凡社
- Hall, Stuart (1985) Significant, Representation, Ideology: Althusser and the Post-Structuralist Debates, *Critical Studies in Mass Communication* Vol.2No.2

5. 主な発表論文等

【学会発表】(計3件)

崔銀姫「韓国放送と歴史認識: 8.15 ドキュメンタリーを中心に」

日本マスコミュニケーション学会春季大会・ワークショップ(2017年6月@新潟大学)

崔銀姫「デジタル時代とナショナリズム」

カルチュラルタイフーン 2018 国際シンポジウム/グループプレゼンテーション(2018年6月@龍谷大学)

崔銀姫「ポスト冷戦と戦争言説の変容」

カルチュラルタイフーン 2019 国際シンポジウム/グループプレゼンテーション(2019年6月@慶応義塾大学)

【図書】(計1件)

崔銀姫『反日と反共: 戦後韓国におけるナショナリズム言説』総 335 頁、明石書店(2019年10月)

6. 研究組織

(1)研究分担者

分担者名: 美馬秀樹

分担者名ローマ字: Mima Hideki

所属機関名: 東京大学

部局名: 大学総合教育研究センター

職名: 准教授

研究者番号: 30359658